

白金萩

六月号



令和元年6月発行 第99号

定例句会（毎月第二金曜日 アビスタ会議室）

七月十九日（金）第四正午～三時・蓮観船吟行五句

八月は休み

九月二十日（金）第3正午～三時・当季雑詠五句

六月例会句会報 （'19／6／21 11名1欠）

光成高志

こんにちはさつきの中に幼女跳ね

木の根道越えて貴船の森涼し

幼子の魚店金魚も鰯もあり

買い出しや木陰うれしく赤信号

泰山木花開かせてあるじ待つ

武者正子

燕の子五つ生まれておめでとう

雲の端を縁取る夕日青田波

投函の為の形代息吹きぬ

吾と会ふ蜥蜴はいつも飛んで逃ぐ

などてはや咲き初めたりし白木槿

佐藤宏之助

塀越しに橡の花咲く下屋敷

夕立の合間にあがる遠花火

夕日照るまほろばの里は柿若葉

水無月の青空映し大河ゆく

落日が山の端に照る麦の秋

増田陽一

武者昭七

太宰忌のコップに混じるコルク片
元号は「戦後」存在と無に西日射す

鴉大鷹声の対峙や青葉闇

ウスバカゲロウ蟻の記憶のありやなし

葬式の話にはづむ祭かな

ゴム長に履替へ童狩にゆく

山車人形いまも美貌の衰へず

女童が颶と螢の火を掴む

あださるの毬はみづいろとこしなへ

どくだみや花ひつそりと庭の隅

紫陽花や御堂へづく墳

大橋や通りも沼も梅雨しとど

紫陽花や主無き家の破れ垣

朝になり孔雀サボテン花ひらく

どことなう明るみさして五月雨るる

降れば降るほどに偲ばれ桜桃忌

紫陽花と一緒に雨を聞くことに

しづかの夏至の令和のつづけかし

骨壺の妻と静かな夏至を語る

シーサーの門柱蝶のふはり越ゆ

兄嫁に真似して薤漬けてをり

図書館を出れば木陰のすひかづら

親燕椋鳥追払ひ巣を守る

光 みち

田宮敦子

下校がてら子の吹き麦薑笛

樗咲く駅前広場雨上る

葭雀白鳥^{スワン}ボートを囁しけり

やれ逆富士の全幅青隙田

竹婦人妻に選んでもらひけり

梅雨滴満開の花頭垂れ

梅雨晴間幼児の列は公園へ

梅雨晴間草引き汗の目に痛し

傘を持つ梅雨のくせ毛や髪うねる

友見舞ふ立葵咲くバス停に

松村幸一 飯田孝二

浅野正美

同郷の家の垣根に茱萸熟れり

梅雨滴満開の花頭垂れ

梅雨晴間幼児の列は公園へ

梅雨晴間草引き汗の目に痛し

傘を持つ梅雨のくせ毛や髪うねる

祭かなと祭を詠嘆されていますので、祭というものは人

祭に来た仲間の中で来れなかつた一人の葬式の話を結構大声で話しているところ、話が次から次へ進んで話が弾んでくる、そんな祭であったという回想句でしょう。

祭かなと祭を詠嘆されていますので、祭というものは人

飯田孝二

草野球泥んこでよし梅雨晴間
木の根道越えて貴船の森涼し
木の根道越えて貴船の森涼し
この木の根道は貴船とあるから鞍馬山のそれです。ここを越えると下りになつてつづら折りを下つて貴船川を渡ると貴船神社に通ずる通りにでます。ここら辺りを貴船の森とみて、森涼しと留められたのです。熱暑の市内を避けて涼みに来る客を当て込んだ川床^{ゆか}料理店が並んでいます。水の貴船神社、和泉式部の歌碑のある結い社、奥宮の舟形石など、もう二十年以上も前になりますが訪ね歩いた記憶を呼び覚まして呉れました。

葬式の話にはづむ祭かな
祭に来た仲間の中で来れなかつた一人の葬式の話を結構大声で話しているところ、話が次から次へ進んで話が弾んでくる、そんな祭であったという回想句でしょう。

増田陽一

シーサーの門柱蝶のふはり越ゆ
上五だけで一句の内容が定まつていて。シーサーは「獅子さん」で、沖縄の屋根に必ずある魔除けの像。内地の唐獅子よりとぼけた感じで愛嬌がある。その屋根の前の門柱であろう。間に「ひんぶん」という風避けの屏もあるところを蝶が越えて行つた。はじめ「ふはり」の形容が甘いと思つたけれど、そうではなかつた。蝶の種類が見えてくるのである。沖縄の民家があたりで越えて行くと言えどツマベニチョウやウスキンシロチョウでは飛翔迅速で「ふはり」とはいかない。イワカワシジミではちらちらしがれるし、ここはオオゴマダラかナガサキアゲハ

の生死も飲み込んで日常を忘れ神様に奉仕する日であるよと韻晦されたのです。あきらめの哲学ですね。

どことなう明るみさして五月雨るる
山吹の盛りを見たく遠回り
公園の八重山吹にふれたくて
一句鑑賞

吉羽多美子

の生死も飲み込んで日常を忘れ神様に奉仕する日であるよと韻晦されたのです。あきらめの哲学ですね。

なんとなく明るさが差して五月雨が降つてゐるという意の句です。どことなくのう音便がどことなう、あかるいを名詞化する明るみと俳句用語を二つも使いまた五月雨を動詞化して五月雨る、その連体形止めにして五月雨るる、なんとも技巧的な詞使いですが、五月雨の一局面を描写している佳句と思います。

シーサーの門柱蝶のふはり越ゆ
上五だけで一句の内容が定まつていて。シーサーは「獅子さん」で、沖縄の屋根に必ずある魔除けの像。内地の唐獅子よりとぼけた感じで愛嬌がある。その屋根の前の門柱であろう。間に「ひんぶん」という風避けの屏もあるところを蝶が越えて行つた。はじめ「ふはり」の形容

が甘いと思つたけれど、そうではなかつた。蝶の種類が見えてくるのである。沖縄の民家があたりで越えて行くと言えどツマベニチョウやウスキンシロチョウでは飛翔迅速で「ふはり」とはいかない。イワカワシジミではちらちらしがれるし、ここはオオゴマダラかナガサキアゲハ

の生死も飲み込んで日常を忘れ神様に奉仕する日であるよと韻晦されたのです。あきらめの哲学ですね。

なんとなく明るさが差して五月雨が降つてゐるという意の句です。どことなくのう音便がどことなう、あかるいを名詞化する明るみと俳句用語を二つも使いまた五月雨を動詞化して五月雨る、その連体形止めにして五月雨るる、なんとも技巧的な詞使いですが、五月雨の一局面を描写している佳句と思います。

シーサーの門柱蝶のふはり越ゆ
上五だけで一句の内容が定まつていて。シーサーは「獅子さん」で、沖縄の屋根に必ずある魔除けの像。内地の唐獅子よりとぼけた感じで愛嬌がある。その屋根の前の門柱であろう。間に「ひんぶん」という風避けの屏もあるところを蝶が越えて行つた。はじめ「ふはり」の形容

が甘いと思つたけれど、そうではなかつた。蝶の種類が見えてくるのである。沖縄の民家があたりで越えて行くと言えどツマベニチョウやウスキンシロチョウでは飛翔迅速で「ふはり」とはいかない。イワカワシジミではちらちらしがれるし、ここはオオゴマダラかナガサキアゲハ

かな、などと楽しませて頂いた。

竹夫人妻に選んでもらひけり

孝三

上五は竹のひやり感を利用して寝るために使う竹箒で、7月の季語と言う。(何で7月か) 東南アジアのホテルでよく見かけたが、竹製ではなかつたようだ。竹夫人といふのは Dutch wife の語からの流用か、(東南アジアは長くオランダ領でもつた)それを妻に選んでもらうと言ふところにある屈折した心理が織り込まれた人生の味があるところ。勿論、ファイクションに決まつてゐるけれど。

雲の端を縁取る夕日青田波

高志

夕方の雲に逆光に夕日が当たり、雲の縁辺が輝いていふさまは美しいけれどそれを短詩でうまく描写するのは難しい。金子光晴は「雷雨を釣つてうごく暗雲の金の笹縁」と言つたし、某氏の句にも「縁赫き夕乱れ雲・・・」とあるけれど、いづれも晦淡で、掲句のようにすつきりと、また充分に言い得たものはないようである。

一句鑑賞

磯田健一

シーサーの門柱蝶のふはり越ゆ

みち

シーサーが鎮座する門柱を蝶がふんわりと越えて飛んで行つた。シーサーは、沖縄で魔除けや除災招福のために民家の屋上や門柱の上に置く獅子に似た獸像。石彫

吾と会ふ蜥蜴はいつも飛んで逃ぐ

高志

同じ爬虫類でも蜥蜴は蛇と違つて嫌悪されず、立派な四肢を持ち円らな瞳は可憐で親近感を抱く人も多い。だが蜥蜴にとっては人間は危険で要警戒の存在だ。出会うと、ときには尻尾を自ら切つての逃走までする。そんな反応に蜥蜴を憎からず思う作者は、はぐらかされたような軽い失望感を覚えて苦笑するほかないのである。

夕日照るまほろばの里は柿若葉

昭七

倭建命の望郷歌「大和は國のまほろばたなづく青垣山大和し美し」でも有名な奈良は、建国の地であるともに柿がよく似合う土地柄で、収穫量全國第1位を誇る。

新緑の季節、柿畠には艶やかな萌黄色の若葉が夕日に照り映えて古語「真秀場」にふさわしい風景が広がる。

女童が颶と螢の火を掴む

宏之助

女童つまり少女とは、「心ばへ何事にも心弱く未練にしてきつとした事はなく、ただ物はかなくしどくないもの」と本居宣長は書いているが、そのような少女でも螢狩りでは闇に飛び螢を瞬時の早業で捕らえてみせる。「颶と」の措辞は、美を奪うに躊躇しない少女の真摯な行動を印象深く写しとる。女童は「めわらべ」か「めのわらわ」と読む。沖縄方言では「みやらび」という。

水無月の青空映し大河ゆく

昭七

陰曆六月、一望の青田原も大河も豊かな水を湛え、頭上には初夏の青天が広がり、河面は陽光に煌めく。「逝くものは斯くの如きかな、昼夜を舍(おかげ)」という孔子の川上の嘆がふと思ひ浮かぶのも、季節感溢れる景色のなか、悠々と流れる大河に生々流転の情感を覚えるためにはちがいない。簡勁に大自然をとらえる秀句。

受贈誌（令和元年東京クラブ六月号）

理佳江

まじ吹くや帆船模型瓶の中
十葉や静まりかかる座禅堂

武子

行人の吹かれ行くなり大南風

璃子

短夜の朝刊配るハイク音

〃

連れ歩く影と語りし花見かな(あすか五月号)山尾かづひろ

光成高志

山尾かづひろ吟行ノート四月(下田)

みち

莢豌豆摘めば次々目にとまり

飯田孝三

どの家も巢燕のゐて夜の静か

白きものはたはた干され海女の家

エンジンの焼玉響く鱗漁

山尾かづひろ

りか陶製で普通雌雄ペアである。白い漆喰でとめた赤い瓦の屋根はシーサーが似合う沖縄独特の風景だったが、戦後は瓦屋根が少なくなり、シーサーはほとんど門柱上に置かれるようになった。怪異な偶像と可憐な小さなものの対比が、いかにも南島らしく面白い。

雲の端を縁取る夕日青田波

高志

地の果ての遙かの雲を夕日の残映がトリミングする。見渡すかぎり青田の海が広がる。いかにも日本的な田園風景だ。日没直前の光彩陸離たる広大な自然を言い止め見事である。

元号は「戦後」存在と無に西日射す

陽一

敗戦後、当時の青年は国家体制の輻から脱し、人間の自由を最高の価値とする実存主義哲學に心を動かされ、サルトルの「存在と無」が知的青年層に良く読まれた。反権力・無神論・不条理への反抗・個人的可能性の追求などの思想は今も持続する。当時の青年も今や老年、だがそのアナキズムは衰えず、実感として元号は昭和・平成・令和も無きに等しく、強いてつければ「戦後〇年」というほかない。籠居する部屋の西窓からは容赦なく斜陽の日差しが奥まで入り込み机の書を照らす。若くして実存思想の洗礼を受けた世代の感慨である。

その人が立ち現れたのは村の仲間たちと隠れ遊びの中だった。村はずれの稻荷神社の裏手だつた。冷たい風、腐った落ち葉のにおい、じめじめとした大地、薄暗い洞さえ口を開いている。洞は他界への通路である。仲間の影はあたりなく、ふと気が付けばどこから来たともしれぬうちにきわめて背の高く、色白な女がひとり寄り添うようにして声をかけてきた。「こちらへおいで、こちら」探しに来た姉の一行もはんみようのためにすっかり面変わりした少年に気付かず去ってしまう。迫つてくる闇が森を隠し大沼の満々たる水面を前に少年は葦の間にたおれふしてしまう。ふたたび女と出会うのは女の屋敷の庭先である。女は蠟燭のひかりに一糸まとわぬ裸身を光らせながらむくむくと溢れ出すいすみに湯あみする。風にゆらぐ灯火の影が女の裸をちらつかせる。溢れる水は洪水のごとく音たてて地面にすいこまれていく。一羽の白い鳥がおんなの脛に翼をやすめるとして女はそれをやさしくふりはらう。谷間の山靈同士のたわむれだろうか。それともあやしい闇の饗宴の前触れか。老夫が来て窓に口を押し当ててたつぱり甘露を飲み干すと去つていく。奥深い谷間の果てに住まいするこの美女には聖なる

闇が森を隠し大沼の満々たる水面を前に少年は葦の間にたおれふしてしまう。ふたたび女と出会うのは女の屋敷の庭先である。女は蠟燭のひかりに一糸まとわぬ裸身を光らせながらむくむくと溢れ出すいすみに湯あみする。風にゆらぐ灯火の影が女の裸をちらつかせる。溢れる水は洪水のごとく音たてて地面にすいこまれていく。一羽の白い鳥がおんなの脛に翼をやすめるとして女はそれをやさしくふりはらう。谷間の山靈同士のたわむれだろうか。それともあやしい闇の饗宴の前触れか。老夫が来て窓に口を押し当ててたつぱり甘露を飲み干すと去つていく。奥深い谷間の果てに住まいするこの美女には聖なる

つたのだ。拾い集めた夢の破片の一つは、大学生の高志さんが白いブラウスを着た女子学生のみちさんと大学に隣接する広島・元安川と思われる川縁で談笑しているシンだ。主宰は二十歳の頃、トルストイの「アンナ・カレーニナ」を読んで感動のあまり、当時のみちさんに熱っぽく感想を語つたと吟行句会報告で回想している。それを読み夫妻の青春を覗いた気になつて、印象に深く残つた。夢の起源はそれにちがいない。というのが私の夢分析である。脱線的に記すと、夢の中のみちさんは原節子そつくりの美人だつた。恋の果報者高志さんが羨ましくなつて、夢の中で私は嫉妬心にかられていた。吟行の句会に不参のはずの私が夢では出席して、投句で最高点を得て悦に入つていた。いじましい根性のあらわれで恥ずかしい。敦子さんは去年の蓮見舟吟行以来の再会であつた。敦子さんは去年の蓮見舟吟行以来の再会であつた。挨拶を交わしていたのは夢とはいえ嬉しいことだつた。
寝惚け頭の夢報告で恐縮千万です。(5.22日朝) ..追伸
蘆花記念館展示品でトルストイの手紙の端正な英文に、主宰は感動し見入つて暫く動かなかつた。どの展示より英文の美に心を奪われたのである。私と主宰はオーブン・カレッジの源氏物語講義の同級生だが、古典の原文の美しさと作者紫式部の文藻の豊かさに、毎回、感動を新たにしている。講師への質問も私はしないが、主宰は

水を管理し、配分する古代の「水の女」のにおいがする。

それにしてもそのあとにくる屋敷をゆるがす深夜の不気味な生動と叫びは高野聖が体現した一つ家の恐怖にあまりにもよく似てはいないか。女は鬼女なのか。それならば少年はなぜその災厄からのがれることができたのか。おそらく一人の一夜の添い伏しの情景がそれを語つているはずだ。千呪陀羅尼の効力で少年は正氣を取り戻し、再び九ツ筋の谷を訪れた時水面を掠めて飛ぶ広やかな翼を持つ白い鳥があつた。

(10)一八・六)

夢の中に　五月号落手の記

磯目健一

窓が五月の曙光に白む頃、不意に夢から覚めて、今まで別次元にどっぷり浸かって彷徨していたことに気づいた。夢の中では全てが秩序立つて進行し、自然に振る舞つてゐる私がいた。現実へ意識が戻つた途端、夢の世界は星屑のように粉々になつて遠離り始める。慌てて夢の破片を拾い集めようとするが、あえなくこぼれ落ちてしまう。なぜ、あんな夢を見たのだろう? 思い返してみると、眠る前に「白金霞」五月号を熟読したが、それが起因にちがいない。五月号の内容に触発され発光したものが、眠りの中で立ち上がり縦横の糸となつて、影絵のように夢物語を織り上げたのだ。「白金霞」がいわば織姫だ

活発にしている。そのたびに教室は活気づき講師との距離も近づく。主宰の姿勢の根本には、詩文への深い関心と鋭敏な感受性がある。古代から今日まで日本人は、素晴らしい外国文化の精粹に心酔し摂取し消化して文化の厚みを培つてきた。それが日本の教養人の特技であり美点でもあつた。紫式部はその一つの典型といえる。記念館の主宰の姿に紫式部とトルストイの組み合せを重ねて見るととても興味深い。「芭蕉のかるみ以後(51)」は、「野ざらし紀行」など芭蕉の紀行文について、博く先蹟に学びつつ俳句の実作者としての知見を披瀝したもの。中国文明の深い影響が古代から芭蕉以後の近代まで及んでいることに触れ、源氏物語はじめ古典文学で多用される引喻法 allusion が芭蕉の紀行文でも効果的に使われていることに着目する。作品が完成に至る過程で、省略、削除、引喻、換骨奪胎など、芭蕉がいかに彫琢に苦心したかを実証的に見る。そのうえで芭蕉の紀行文は、單なる体験の直接表現ではなく、実地の自然観照を内在化していることに着目する。作品が完成に至る過程で、省略、削除、引喻、換骨奪胎など、芭蕉がいかに彫琢に苦心したかを実証的に見る。そのうえで芭蕉の紀行文は、単なわち記憶の幾重にもわたる加工の末に生まれたものが芭蕉の紀行文なのであって、ノンフィクション(実録)として読む読者の素朴な受容を戒める。芭蕉は日録風に紀行文を書いたのではなく、体験を再構成し時にはフィク

ションの造型も加えて芸術作品としての創造を目指した。それゆえ芭蕉の紀行文は書かれなかつた空白の時間の方が多い、その書かれなかつた行間を読みとることが大切なのだと力説する。じつに卓見であり、一つの到達点を示すものといえよう。武者昭七さんの「鏡花断想（高野聖）—靈水を祀るものー」は短篇ながら光る評論だ。泉鏡花は、自然主義が風靡した時代にあって反近代的なロマン主義の孤星を死守した文豪。その傑作「高野聖」の作品世界を独自の視点から浮かびあがらせる。日本人の魂の奥に潜む祈りと憧れを連綿と伝承する耽美主義・幻想主義文学こそ武者さんの親炙するテーマと思われる。

既に「白金霞」掲載の「宮沢賢治論」でも犀利で魅力的な文章で作品の人物像の心に迫つて見事な論評を展開している。今回の鏡花断想も期待を裏切らない内容で、次号からが楽しみである。失礼ながら米寿に近い高齢なのに、なんという新鮮な文体かと読むたびに三嘆している。精神は老いない例証がここにあると思う。（52メール）

芭蕉のかるみ以後（52）

光成高志

かるみを連載してきて52となつた。このままで行くのかわからないのではいけないと思いここで立ち止まりよく考えてみたい。高二で初めてふれた奥の細道を

狄を出、鳥獸を離れて、造化にしたがひ、造化にかれとなり。「ここまで朗讀したがこここの文章にどんなにか勇気づけられたことか、今現在もこの精神に変わりない。読んで行けば胸が詰まる。小林秀雄もCDで氏の伯父の人生にかこつけて宗教觀をしやべっている。どう考えたって仏さん神さんの方が偉いんだから、我々はどうだつていじやあないか。なにが哲学が要る、何が議論が要る、何が神学が要る、向こうさんの方が偉いんだからこつちはどうだつていいじやあないか、何がなくたつて深い信仰ができますよと。神仏を私は造化と思っているので、造化に従い造化にかかるんだと思う。芭蕉は幻住庵記に若いときからの心情を結構赤裸々に告白している。元禄三年（一六九〇）春から夏まで近江の大津国分山の幻住庵に住んだ折の感慨を述べたものが翌年の『猿蓑』に收められ、これが定稿とされるが、そこについたまで幾度となく推敲が重ねられ、今日多くの異本が伝えられているとか。そのうちの一つである『芭蕉文考』（編者不詳 享和元年 所収の文を左に示す。

我しづて閑寂を好としなけれど、病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。いかにぞや、法をも修せず、俗をもつとめず、仁にもつかず、義にもよらず、唯若き時より横ざまにする事ありて、暫く生涯のはかりごととされ

通り、できれば十哲にもふれ、蕪村・一茶にふれ、明治の子規を通り、誓子にたどり着き、そして私はどうなのがを書いてお終いにできればこの上ないと思つてゐるが、まだ野ざらし紀行で逡巡としているようでは到底これは夢に終りそうである。これは言訳に過ぎないが、芭蕉に関連する人物・書簡・文献・俳文だけでも栗田勇著芭蕉の巻末にびっしり書き込まれてあり、後世の参考文献はこれも殆ど無限にあるし、私には気が遠くなるほどである。芭蕉が和漢の文献にかかるく、西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休が茶における、その貫道する物は一なり、と書いてゐるので、それらの古人にふれるだけでも時間がかかる。あれから思ひ続けてきて、思い出すのは、私の会社定年の時になかスピーチをしてくれと云うので、大抵は博士論文とか研究成果を披瀝するのであるが、私は右の笈の小文をちよいと朗讀してその責任を果たしたことである。建築会社があるので、そんなものの関係ないよと云われれば即座に止めようと思つてしまつたのであつたが、皆神妙に聞いてくれた。その中で「しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずという事なし。像かな花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷に止めようと思つてしまつたのであつたが、皆神妙に聞いてくれた。その中で「しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし。おもふ所月にあらずという事なし。像かな花にあらざる時は夷狄にひとし。心花にあらざる時は鳥獸に類ス。夷

なれば、万のこととに心をいれず、終に無能無才にして此一筋につながる。凡西行・宗祇の風雅にをける、雪舟の繪に置る、利久が茶に置る、賢愚ひとしからざれども、其貫道するものは一らなむと、背をおし腹をさすり、顔をしかむるうちに、覚えず初秋半に過ぬ。一生の終りもこれにおなじく、夢のごとくして又々幻住なるべし。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

頓て死ぬけしきも見えず蝉の声

ひとまず椎の夏木立に隠者のように身を寄せて、次の旅路にあらむとする束の間の憩いに浸ろう。いつも生死の無常、住処は幻だもの。蟬が短い命とは知らず鳴きしきるその声、此の世は無常迅速という意である。なんと肝の据わつた句ではないか。椎の木が何故詠まれるか。源氏物語の椎本しいがまも卷があり、この巻名は八の宮の死後宇治を訪れた薫が、優婆塞（在家の男の仏教信者）に違いない人の宮を椎の木に喻え、「立ち寄らむ蔭とたのみし椎が本むなしき床になりにけるかな」と詠んだことによる。また万葉集にも「片岡のこの向むか峰おに椎まかばイメージがあつた。これを踏まえて芭蕉も椎の木を詠ん

でいるのだ。本来、椎の木は神楽庭などにも採用される聖なる木である。幻住庵のすぐ隣には近津尾神社の社務所があるし、芭蕉が先づたのむ椎の木と詠む椎の木は、

近津尾神社への挨拶とともにれる。芭蕉にとって、頼もしい存在が隣人でもある近津尾神社であったのだ。何時

だつたか平成十年だつたか、私はこの記を読みながら、庵の跡を尋ねたことがある。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゞせたまふ。ここはわかりやすいが中程からは杜甫（七二一～七七〇）や黃山谷の漢詩を引用した瀟洒な文となつており、谷の清水を汲んで自ら炊ぐ、とく々の雲を侘て云々とあり、この清水樹は私の生家にも一本あつてこれが見えると我が家と思はれてあつた。その時の思い出もあるが、椎の木の大樹が確かに在つた。庵跡には義仲寺の翁堂のような庵が建てられてあつた。その時の思い出もあるが、椎の木の大樹は私の生家にも一本あつてこれが見えると我が家と思はういわば目印にして過ごしたこと、懐かしく思い出す。今源氏の蓬生の巻も読んでいるが、その中に杉ならぬ木立のしるさに、という文があり、これは古今集の「わが庵は三輪の山もと恋しくは訪ひ来ませ杉立てる門」という歌を引用しているとか、芭蕉は杉の代わりに椎の木があつて内心完爾としたのではないかと思つた。このようにすぐ脱線してしまい中々進まない。今回は芭蕉の描いた野ざらし紀行画巻のことにつれ、何よりも軽みの句は

こういうものだと書こうと思つて来たのに書けずにここで続くとしなければならぬ。

俳窓評論纂

*改元があつて一ヶ月余り、先月の本誌にも「新元号令といふ字を憎みけりニ『三元号変ピケルスの蓋開かぬなり』という投句があり、令和という元号に違和感どころか、令という字を憎むという心待ちをはつきり書かれた昭七さん、それに同感された陽一さん、健一さんの鑑賞文が得られた。又「天皇に余生ありたる行々子」の孝三さんの句についてもお一人のこれは対照的な鑑賞文が書かれた。改元は我が国の天皇制に思いが及ぶことなので、私は注意深く新聞などの報道を見ていた。手元に朝日新聞の文化芸欄に載つた四回のスクランプがある。それを簡単に紹介する。4.10の小島毅の「令和」ぬぐえぬ違和感という見出し、国書強調 伝統の成り立ちを軽視しているかのように映るとして、令和の読み方は「りょうわ」が出典の時代からはそう読むべき、ほんとは淑和がよい。元号は漢字文化圏全体が共有する伝統なのにこれを軽視して国書からとというのが浅薄だ。4.16の品田悦一よしがは万葉集「愛國」利用の歴史の大見出しで、「庶民の歌」に異議、昭和は軍国歌謡に、左翼も礼賛の小見出し、先の

句の鑑賞文と同工異曲です。4.18は天皇「脱出の権利」改めて考える、の大見出し、皇室は身分制の飛び地、共和制に移行し自由を、という小見出しにて長谷部恭男の意見を紹介、橋爪大三郎の尊皇共和制の提唱を紹介していく。6.5の終わりと始まりの大見出しにて、池澤夏樹の新元号を考える令和にひざまずく先は、の見出しにて皮肉的に改元をこれは揶揄している文章だ。今回呼ばれた有識者の面々に学者はいても詩人は一人もいなかつた。何故呼ばぬ、石川九楊、糸井重里、岡野弘彦、高橋睦郎、谷川俊太郎、長谷川櫂、馬場あき子、こういう人たちが参考すべきだったと。六つあつた案では万和ばんながせめてよかつた。いくたび元号を変えようとも、変わらない陰の元号がある。それは「戦後」。結びがいい。日本国憲法の上に日米安保条約があるかぎり、我々はこの転くべきから逃れられない。こういう文章を読むと私はどうしても三島由紀夫に思いが至る。

*6.9 朝日歌壇・俳壇の「うたをよむ」は自然詠の衰弱 とするところ、以前私が指摘したことと同じだ。この季節は樗（ちち）の花が見たくなる。棟とも書き、旧仮名ではあふち、梅檀ともいう。我孫子駅南口にあり宏之助さんとするとよい句にされる。「あふち咲く外面そとも木陰露落ちて

五月雨晴るる風わたるなり」（藤原忠良）は新古今和歌集にある。最近の歌集から「鉢」（つゝ）蓄麦屋の暖簾の下にありはつかに搖るる鉄線の花（内藤明）、「しをれたる夏の野菜の大きなる葉つぱ細き葉、土に浮かびて」（山下翔）。話し言葉が中心の口語歌隆盛の昨今、山河や草木など自然をうたう歌がたいへん少なくなつた。したがつてそれを読み味わう文化も衰弱しつつある。残念なことではないか。人間心理も面白かろうが、はやり自然に向き合つてこそ大いなる存在というものを知り、己の卑小さを思ひ知るというのだ。以上で締めている。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 急に天気も回復かつ暑くなりそうです。昨（21日）日白金霞五月号が届きました。有難うございます。何時もながら小振りですが中味が充実しており、じっくり読ませていただいております。さて7月19日の蓮見舟句会にはぜひ一緒にさせていただきたく、五月五日にはスケジュールに記入済みです。よろしくお願ひいたします。

草々（23）林半寿

令和元年五月も終りました。白金霞五月号受け取りました。その後お変わりありませんか。元号の変わり目で十連休という休みがあり、娘や孫が皆来てバーベキュー

して食べて帰った。私は何もしない。よばれただけまあ楽しい一日だったかなー?私は元気でいます。今年は稻作り止めて少し気は楽だが夏草が生えて管理が大変と感じている。夏草が生えて大変休耕田 夏井いつきの俳句授業受けてるが上手くいかないなーそれでは又お便りします。

(テレビ俳句は局の営業でやつてあるものでそれが俳句だと思わないでください。もしも興味あるのでしたら、白金霞の私に沢山書いて送つて下されば見てあげます。俳句は文学という学問の一つなのです。学問は何ものにもとらわれない心が一番大切です。高志)

光 みち様 光成高志様 そろく梅雨近しの日々となりました。思いがけぬ我孫子の俳人お二タ方様と航空公園にお供させて頂きありがとうございました。沢山吟行句お作りのことと存じ上げます。私はヨタク婆さんにお気遣い頂き迷惑と存じ、ころばぬことばかり脳中があり、ただでさえ、句も浮かびませんのに、教えて頂いたシラカシなど植物を眺め青芝を踏み、開放気分を楽しく味わうことで満足いたしました。お写真もカッフルが誠に素敵に若々しく嬉しく拝見しております。片や老いては写真は動きが無いだけ実物より更に老いが丸見えで折角お写し下さったのにお一人の中に入つて申し訳なく存じております。我孫子のお菓子美味しく最中の皮の

とかするように頼み、仕事をしてもらうのにも片づけようと二十九日の朝十時から夕方五時迄フランチもコーヒー・ブレイクもせず四十年間手もつけずにあつた箱やら何やら開けて見れば誰が買ったか頂いたか解らぬ漆器やら郷土玩具やらその他モロく、マツキヨで買った殺鼠剤は結構食べてゐて品物を全部出して掃除、ねずみが食べなくなる迄殺鼠剤は置くようにと書いてあり、食べる内出血を起して確実に死ぬとのこと、納戸のあつた品物は使つてない物の方が多く、とにかくこの際全部月二回の破碎ゴミの市の収集日を待つて捨てるべく大きなビニール袋に入していくつもあり、これが無くなりネズミが来なくなるようになる迄落ち着きません。わざくよろしくとおっしゃつて下さつた私のバカ猫共の役立たずになりました。納戸はドアで閉めてあり北側にガラス窓で猫は入れないので、ネズミも猫の気配がわからないのでしょうか。下らぬグチお許し下さい。言訳がましく申し訳ないと思いつゝ頂いたお写真やあたたかいお便りにお返事をすることもできませんで、かくの如き大事件まだ終結に至らずです。マツキヨに殺鼠剤を買いにいったら、食べさせると粘着紙にはりつくのとあるとのこと、張り着いたら、それをどうする事も出来ませんものね。考えただけでも寒くなりました。光成様にせめて写真代に切

うすいのが珍しくて大変気に入りました。又光成様のマイファームのレタス収穫に惜しいセロリ新鮮で冷蔵庫にまだ半分保存してあります。玉ねぎ、赤いのと白いの茎をしばつてあるのが農家の写真や外国の絵などにもよく見るので一寸アコガレ頂かずに台所に吊して楽しんでいます。天日にさらしていいのか解らず完全な状態で皮が乾くように思っています。航空公園行きで五月後半のよしなし事が終り、残りは東京クラブ六月句会の句でも考えようと思いましたら、あの夜の十一時頃大事件発生結局就寝一時半になりました。十一時頃納戸に一寸いるものを取りに入つたら床に棚に置いてあつたプラスチックの容器など落ちていて、地震でもないのに、物が落ちるとは考えられずその辺りを見まししたら何と四十雀達にやるエサ(ひまわりのタネ)が喰いちらされた皮になりいっぱい落ちていました。物をどけたら凄い有様で考えるのにネズミの仕業としか思えず見てしまつたからにはと、とりあえずゴミを掃除しましたら、黒いゴマ粒ほどの多分フンらしいものもありまだ開封していなかつたひまわりのタネの袋に穴が明きそこから引き出して食べたようです。気持ちの悪いのと両方で、良い事のある後に悪いことありと情けなくなりました。四十年何事もなかつた納戸に何故?出入りの工務店の親方に進入口を見つけて何

手と思いましたら、土日で①休み、三日(月)にこの巴らくしてお手紙ポストへと思つております。白金霞におのせ下さいませんように。またいつか仲良しカッフルにおめもじできればと願つております。お大切にごきげんよう。二十九日の七時間労働、キャタツに乗り降りほこりろまみれ重い物もありいくら何でも96歳の体は悲鳴を上げ、三十一日一日は頭の中がガランドウでも日常のことはしなければならず、よく死ななかつたと思つています。

(6.3 瑞子)

(玉ねぎの白いのは吊つて乾かしてもいいですが、紫玉ねぎはサラダ用なので、冷蔵庫に保存、お早めにスライスしてお召しあがり下さい。それから、璃子さんのお手紙はお気づきではないのでしょうか。非常に面白く、日記文学のようで、又徒然草的で価値がありますので、採不採は編集者にお任せ下さい。)

光成たかし様みち様 高志^{II}たかし仮名も良いお名前ですね(腰毛書てました) 航空公園のお疲れお取れましたか。あの暑さがこの一三日はこの寒さ日本のみならず地球はたしかに異変ありと 思います。東京クラブ発足以来八月例会は休会となりました。会報の句に「だし雲」と云うのがあり、どんな雲か伺いましたがはかばかしいお返事ありませんでした。ご教示下されば幸です。(6.11 瑞子)
(だしどういうのが船出に都合の良い出し風のことを云うそうです)

から、だし雲というのはそういうだしが吹いてるときに出てる雲のことでしょう。角川の季寄にだしの傍題に載っています。雲の形を

思います。晴夫さんのだし雲の句は理に走っています。又「白南風や龍骨洗ふ波頭」も同様 言葉で作句されていますね。(高志)

昨日はお世話になりました。句の書き取りをするのも面白し、梅雨の雨も降らないで良かったです。小生秘かに最近高齢者事故のジャーナリズムにおどかされ通しながら、平和に作句すべく十月には運転免許返上しようかと考えております。高温多湿のなか御自愛の程。(622陽二)

紫陽花が大輪の花を咲かせるころとなりましたが、お元気ですか。白金霞五月号有難うございました。毎月送つていただき感謝しています。投稿されておられる方々の語彙の豊富さに驚き読んでいます。私方、年々年を取りにしたがつて体力が下がつていくことを感じています。ソフトテニスとグランドゴルフで体力の維持をと思つています。梅雨の寒さにお身体を大切にお過ごしください。
追伸: 5/31朝から起床時目の前が回転するようになり、耳鼻咽喉科脳神経外科内科と診察してもらつていて返信が遅くなりました。特に病名はなく、心配しないでください。
S O A も句会も終わつて当分は主宰とも清談を楽しめず残念です。散歩を兼ねて図書館通いでもと考えていました。

編集後記

今日は六月二十四日(月)、本誌の編集後記に来ました。健二さんのメールが夜中に届いたようで、句会の金曜日、土日月三日目にここまできます。感謝の言葉をいつも申し上げる暇がなくて、せつかのなんとかさんと云われているようですが早く来れること感謝します。昨日沖縄で知事の平和宣言がありまして、中に肝心(ちばくじん)という言葉があり、これが沖縄の心と訳されています。沖縄弁で書かれている宣言文は私には分かりませんので、英訳を読んで理解しました。「先祖がチムググルと呼んでいる沖縄のあたたかい心を子ども達やその子どもたちへ伝えていかなればなりません」と訳される。日本本土でもこれは同じです。沖縄は外国ではないのだからなんとならないのかと思います。改元の項に遠慮がちに書いた末尾の文章が私の思いです。政治にかかる意見は書かないようにしていますが、今月は沖縄の日にぶつかり右のようになりました。

今月号には美人が二人出て来ます。それはさておき、陽一さんのシーサーを越えた蝶の名、学名ですか、カタカナで書かれた蝶、陽一さんならでは、こんな鑑賞は出来ないでしょう。また、健二さんの鑑賞文のサルトルが

す。一句鑑賞をおくります。また、拙句への添削をお願いします。(24 健二)

我孫子日記

5/17	例会
* 5/21	北総病院
5/22	SOA
5/25	航空公園/ 璃子宅
*2 5/29	YS
5/31	青芝に舞台設へ国産機 (YS11)
JH	YSに青の一線夏の色 (みち)
6/5	飛翼にも片陰ありて人憩ふ (リ)
6/8	白樺と櫻の緑蔭ありにけり
6/12	天上でゆ鳴きしきりをり四十雀
SOA	大櫻の根方に匂ふ金銀花
6/15	青芝の葉桜筵幾家族
新宿	緑さす櫻通りの松公園
6/17	薔薇真つ赤公園駅の広場哉
雅叙園	璃子女史能弁にして新茶注ぐ
6/19	*3 男気のブロンソンのパナマ帽
SOA	古びたる麻服を着て紳士たり
6/21	*4 凤凰のむくりの屋根に夏日照る
例会	若楓行人坂の大田寺

次回は蓮見舟吟行、八月は休み、九月二十日例会 七月四日東京吟行句会を予定しています。来年は十周年記念号の編集、再来年(2022)夏に刊行予定です。せつかちな性格はどうも直りそうにありません。来月号が百号、二〇二一／四が百二十号になる予定ですので、取りあえずそれを目標に生きて行きます。こんな大げさな後記になつてしましました。みちさんが出かけた留守に自由に書いております。

白金霞六月号(通巻第九九号 令和元年六月二十四日発行
編集・発行人 光成高志 発行所 一七〇・一一二九 我孫子市南新木二四一七
表紙の題字: 加納綾女 同写真は令和元年六月二十三日の白金霞